論　文　内　容　要　旨

論文題目

病棟看護師の退院支援実践向上を目指した ICT による退院患者フォローアッププログラムの開発と評価

教育・研究領域：生涯生活支援看護学

氏　　名：進 藤　　真 由 美

【内容要旨】（1,200 字以内）

本研究は，退院支援の主な実践の場である地域包括ケア病棟において，病棟看護師が ICT による退院患者フォローアップを体験するプログラムを開発し，病棟看護師の退院支援の実践向上が図られたかを評価することを目的とした。

対象は A 県内 2 病院の地域包括ケア病棟（X 病棟（介入群），Y 病棟（非介入群））の看護職計 42 名とした。X 病棟のみ ICT による退院患者フォローアップを体験する介入（以下，介入）を実施した。介入前後で退院支援実践自己評価尺度（the Discharge Planning Ward Nurses :DPWN)）等の群内での変化を評価した。

X 病棟では介入終了時に DPWN が有意に上昇し，介入後に有意に低下した。Y 病棟では介入前後で DPWN の値に有意差はなく，介入後は有意に低下した。

本研究で開発したプログラムには，病棟看護師の退院支援の実践向上に貢献する可能性があることが示唆された。今後は交代勤務や他の業務と併行して退院支援に携わる病棟看護師の負担を軽減するシステム構築が期待される。

令和５年１月12日

山形大学大学院医学系研究科長　殿

学位論文審査結果報告書

申請者氏名：進藤　真由美

論文題目：病棟看護師の退院支援実践向上を目指したICTによる退院患者フォローアッププログラムの開発と評価

審査委員：主審査委員　櫻田　香　印

副審査委員　佐藤　幸子　印

副審査委員　齋藤　貴史　印

審査終了日：令和５年　１月　10日

【論文審査結果要旨】

現在我が国では在宅医療が推進され、地域包括ケアシステムの構築が進められている。地域包括ケアシステムでは、集中的な入院治療と生活を支える在宅医療を患者自身が必要に応じて使い分け安心・安全に療養の場を移行できることが重要であり、退院支援は多くの病院で行われるようになってきている。しかし、退院支援の質の評価、再入院予防等の効果については検証がなされてない。本研究では、地域での看護職者の連携をICTの活用で促進するシステムを構築し、退院支援の質向上が図られるかを検証した。対象は、A県内２病院の地域包括ケア病棟（X病棟（介入群），Y病棟（非介入群））の看護職計42名である。準実験的デザインでICTによる退院患者フォローアップを体験する介入を実施し、退院支援の実践が向上したか検証した。介入はタブレット端末を用いて退院後の患者の自宅と病棟を繋いだ面談形式で実施された。評価は、介入開始時、介入終了時、介入終了後３ヶ月後の３時点において、退院支援実践自己評価尺度（the Discharge planning Ward Nurses: DPWN）と退院支援の認識(VASにて評価)で行われた。対象者の平均年齢はX病棟39.9±6.0歳、Y病棟50.1±6.8歳でY病棟が有意に高く、在宅看護論の履修はX病棟16名(76.2%)、Y病棟５名（23.8%）でY病棟が有意に低い割合であった。介入群において、介入開始時と比較し介入終了時でDPWNの有意な上昇が認められた。しかし、介入後３ヶ月後の評価ではDPWNの低下がみられ、ICTを活用した退院支援介入の効果は持続していなかった。退院支援の認識について、退院支援の困難度、退院支援の満足度、退院支援実施意欲の３つの内容で介入群、非介入群を比較した結果、いずれの項目においても統計学的な有意差は認められなかった。以上より、ICTを活用した看護連携システム構築は退院支援の質向上に貢献する可能性が示唆された。また、効果持続のためには連携システム改良含め更なる検討が必要であることが明らかとなった。

本研究について、論文および口頭発表に基づき審査した結果、研究の目的が明確で、方法も妥当であり、考察も適切であることから、本研究は学位論文（博士）として相応しいものと評価した。